

ニエース専修

毎月1回15日発行
発行所
専修大学広報課
☎101-8425
東京都千代田区
神田神保町3-8
☎03-3265-5819(直)

主なニュース

- 国立美術館キャンパスメンバーズ加盟……………③
- 創立147年鳳祭 11月6〜8日開催……………④
- まちづくりGDX研究拠点が公開講座……………⑤
- 【校友を訪ねて】片野由布さん(平20法)……………⑥
- 石巻専修大学 笑顔と歓声の石鳳祭……………⑦

被災された皆様へ

令和8年台風第25号に伴う災害で被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。
専修大学と石巻専修大学は、被災された学生と保護者の方に対して、安心して学業が継続できるように支援を行っております。以下の担当窓口にご相談ください。

学生生活課(神田)	Tel 03-3265-6824
学生生活課(生田)	Tel 04-911-1267
大学院事務課(神田)	Tel 03-3265-6568
大学院事務課(生田)	Tel 04-911-1271
法科大学院事務課	Tel 03-3265-6891
石巻専修大学事務課	Tel 0225-227712

校歌制定100年 同じ旗のもと、同じ歌を

専修大学校歌

作詞 高野辰之
作曲 信時潔

宮城の北 柁地に立ちて
礎固し 我等が大学
質実な姿 真摯は心
学徒幾千 理想に生きて
済世の道 ここに学び
経綸の策 ここに究む

鳳の翼 両手に開き
世に魁けし 我等が大学
剛健の意気に 力行の勇に
学徒幾千 希望に生きて
常久の富 ここに萌し
限りなき幸 ここに芽ぐむ
我等が行く道 磐石なせり
我等が行く手は 光に充てり



1926(大正15)年、今なお歌い継がれる専修大学校歌が誕生した。今年は制定100年という記念すべき年にあたる。なぜ、専修大学はこの時期に校歌を制定したのか。当時を振り返ってみよう。

1923(大正12)年、関東大震災が発生し、相前後して創立者である田尻稻次郎、相馬永胤が逝去。さらに、1918(大正7)年に公布された大学令によって、早稲田や慶応などの私立学校が次々と私立大学へと昇格するなか、専修大学はようやく1923年に念願の大学昇格を果たすものの、その波に乗り遅れ、学生集めに苦心する。震災復興にかかる費用も相まって大学は恒常的な財政難に陥るなど、大正期の専修大学を取り巻く状況は非常に厳しいものであった。

大学当局はもちろん、こうした状況にただ手をこまねいていたわけではない。学生を増やすべく、新校舎を竣工し、新たに学部や学

なぜ校歌がつくられたのか ～100年前の専修大学を振り返る～

科を設置するなど積極的な拡張策を進めるほか、学生や教職員、卒業生の心を一つにするための施策も打ち出していた。それが校旗や校章、そして校歌の制定である。では、大学当局は校旗や校章、校歌に何を求めていたのか。それは専修大学に集う者たちのアイデンティティの形成である。苦しい今だからこそ、同じ旗のもと、同じバッジを付け、同じ歌を歌うことで全員一丸となって専修大学を盛り上げていこう。そうした機運を作り上げようとしたのである。

もう一つ、校歌は学校の存在を社会的に周知する役割も果たした。この時期、野球をはじめとした大学スポーツが隆盛し、その様子は新聞にも取り上げられるほど、社会的に大きな注目を集めた。その応援の場で校歌を歌うことは大学の存在をアピールすることにつながる。専修大学校歌が校舎の場所を示す「宮城の北、柁地に立ちて」という歌詞で始まるのはそのためで、専修大学はどこにあり、どのような大学であるのか、それを歌詞に込めたのである。苦難の時期の専修大学を支えるためにつくられた歌、それが校歌だったと言える。

作詞家・高野辰之の手による専修大学校歌の歌詞



(大学史料室長・瀬戸口龍一)



【音源を再生】

住宅団地の活性化策提案



石川県や企業の関係者らを招いて開かれた最終成果発表会

産官学連携事業 加賀市まちづくり フィールドワーク

専修大学、石川県、大和ハウス工業株式会社(大阪府大阪市)による産官学連携事業「加賀市まちづくりフィールドワーク」の最終成果発表会が9月9日、東京都千代田区のPYN T竹橋で行われた。高齢化や過疎化が進む住宅団地の「再耕」をテーマに、約4カ月に

わたりグループ活動に取り組んだ学生たちが、その成果を発表した。「再耕」とは、大和ハウス工業株式会社による造語であり、団地を元通りに再生するのではなく、新たなまちの魅力を生み出したいという思いが込められている。さまざまな学部から集



加賀松が丘団地の皆さんと
11月8日

解決に取り組んでいることが伝わる発表だった。その他のグループからは、地域資源である赤松林を活用したコミュニティづくりや、松が丘の魅力発信するためのSNS活用策などのアイデアが報告された。グループ活動では、コミュニケーションに苦労することもあったというが、長治さんは「議論を重ね、提案の方向性を定めていく過程で、自然とチームワークが生まれた。今日の発表でも資料作成を含めて全員でやり切ることができた」と活動振り返った。春田佳穂さん(国コミユ)は「フィールドワークではさまざまな世代の方と交流し、多くの気づきを得ることができた。学生の間にこうした経験ができたことは貴重であり、今後に役立てたい」と手応えを語った。このプログラムは、2024年に本学と石川県が締結した包括連携協定に基づき取り組み。今回は石川県の「サテライトキャンパス推進事業」を活用し、加賀松が丘団地の再耕事業を手がけている大和ハウスの協力も得て実施された。